

---

# マスカーレイドに異常なし！？ 第5話 レスチア再び

水鏡樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マスカーレイドに異常なし！？ 第5話 レスチア再び

### 【Zコード】

N7702A

### 【作者名】

水鏡樹

### 【あらすじ】

マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第五話は滝を破壊しようとレスチア＝クマロフが再び姿を現す。レスチアの目的は滝の破壊なのか、それとも……？

## その1・レスチアの来店

「フツフツフ、わたくしはまだ諦めたわけではないのですよ?」「フードを頭からかぶつた人物が、あごに手を当てるポーズを決めて含み笑いをもらした。

顔はわからないものの、声はあきらかに男のものだ。見上げると空には星空が広がりつており、同時にマスカーレイドの象徴でもあるウォル

ガレンの滝が視界に入ってくる。

男は辺りをキヨロキヨロと伺い、背負っていたナップサックから複雑な機械のようなものを取り出した。それを滝の周りへと設置していく、近場の砂で目立たないようにカモフ

ラージュを施すと、稼動を確認してからその場を離れる。

一つ、二つ、四つと設置を終えて、男は着用していた手袋を外した。大きく息を吐き、

ウォルガレンの滝を離れようと振り返る。と、そこには。

「おいっ! そこでなにをしている!」

見回りをしていた自警団所属のハリアーだった。男はフードの上から頭をかきつつ、

「ヘツヘツヘ、ただの観光でさあ、だんな」

声色を変えて答える。ハリアーはゆっくりと男に近づくと、滝を見あげながら続けた。

「観光ならもつと離れてみるんだ。滝の周りに近づくのは禁止されている」

「それはまた、どうして?」

「滝を破壊しようとした輩がいたせいで、禁止になつたんだ。おまえもこんなところをつらつこつてこると、そういう破壊魔と間違えられるぞ」

「ありがてえ忠告だ。間違えられないうちにあっしも遠くに離れる  
としましょう」

男はフードをかぶつたままハリアーの横を通り、マスカーレイドの街の中へと消えていく。男を見送つてからハリアーは、あぐいをもらじつつ見回りを開することにした。さきほどまで寝てたせいか、まだ完全に日が覚めていない。ハリアーは滝に背を向け、もと来た道を戻りはじめた。男の配置した機械にはまったく気づかず……。

普段となにも変わらないオートエーガンでは、いつものように平和な時間が流れていった。

カウンターには節約のためか、朝食と昼食を一食で済ませつつするハンター、定位置でコーヒーを飲みながら小説を書くクネス。シェラは額に汗を浮かべながら、使い終わつた食器を洗つている。

しばらく静かだつた店内の静寂を破つたのは、開くと鳴るように備え付けられている入り口の鈴だつた。チリーンと乾いた音が店内へと響き渡る。

「こんにちはあ」

店内に入つてきたのは、ユキ=ボウのお店で働いてるヒルフのラビだつた。

「あら、珍しいわね？」

キッチンから出てきた二オが、ラビの姿に目を丸くする。満面の笑みを浮かべた

まま二オへと頭を下げたラビ。

「今日は久しぶりのお休みですか？」「いやで昼食でもとらうと思つたんです」

「いい選択肢を選んだわね。やみつきになっちゃうわよ  
クスクスと微笑みながら、ニオは台所へと戻っていった。ハンタ  
ーの横に座ったラビに

シェラが注文を聞きにいく。

「ご注文はどひりますか？」

「あれえ、まだここで働いてたんですかあ？」

「ぐつ！」

久しぶりに会ったラビから無意識の一撃を食らったシェラは、あ  
からさまに動搖してい

た。握っていたペンがシェラの手から離れ、床を「ロロロロ」と転がつ  
ていく。

「わ、悪かったわね！ 傭兵の仕事が来ないんだからじょひがない  
でしょ！」

床に落ちたペンを拾うと、シェラはラビの注文をとつてニオへと  
内容を伝える。

再び洗い場へと戻ったシェラに、ハンターがポツリとつぶやいた。  
「まだ傭兵職に復帰するつもりだったのか。てっきり一生ウエイト  
レスとして生きていく

のかと思つてたんだが……」

「そんなわけないでしょ！」

シェラの反応にハンターはふむと頷くと、肉抜きAランチの野菜  
をつつきながら話を続  
けた。

「だつたら特殊部隊の入隊試験でも受けに行つたらどうだ？ そろ  
そろ定期試験の時期だ

ぞ

「特殊部隊の入隊試験？」

「王都直属の部隊さ。シェラは剣術が得意だから、第一特殊部隊を  
受けるといい。通らな  
いかもしれないが、いい線はいくと思つぞ」

シェラは頭をかきながら、口をへの字に曲げた。

「あまりお抱えって、好きじゃないのよね」

「近衛兵と違つて、特殊部隊はある程度自由だが……まつ、おれも薦めはしない。そういう道もあるって話さ」

「コーヒーをすすり、ハンターは大きく息を漏らす。シェラは一度だけ首を傾げてから、

食器洗いを再開していた。

「はあーい、Aランチお待たせ！」

キッチンから二オがラビの注文を持ってきたのと同時に、再び入り口の扉が開いた。

「いらっしゃいませ！」

完璧な営業スマイルを放っていた二オは、入ってきた人物の顔を見ると同時に顔をしかめて警戒心を露していた。

あきらかに様子のおかしい二オに、全員が入ってきた客へと注目する。ちょび髭に背広姿、つりあがつた目にメガネをかけていたその男は、以前、滝を破壊しようとしていたレスチアだった。

「レスチア＝クマロフ！」

シェラの叫びに反応して、裏でお酒を飲んでいたアルマが飛び出してきた。滝を破壊し

ようとしたレスチアと同一人物であると確認すると、

「貴様、いつたいなにをしに来た！」

とげとげしい口調でレスチアを睨みつける。だが、当の本人はまったく気にしたよつ

もなく、ラビの隣へと腰掛けた。

「いえいえ、近くまで来たものですから。このお店の料理はどれも美味しいと評判ですの

で、いかほどのものかと……

「貴様に出す料理などない！」

「おやおや、嫌われたものです。別に滝を壊しにきたわけでもないのに」……

ギリギリと歯を鳴らして威嚇するアルマを、一オが懸命に押さえつける。

「シヨラ、注文をとつて」

「いいの？」

「一応、お客様だからね」

「一応とは失礼ですな。ちゃんとお金も持ってきてるのですよ?..」胸を張るレスチアに、アルマが舌打ちを放つ。一オは無言のまま、アルマを裏のキッチンへと押し込めた。

「『注文は?』

シヨラは仮頂面でレスチアの前にコップを叩き置いた。わずかだが水がカウンターの上にこぼれる。レスチアはメニューを見ながら「」をなで、一番高いDランチを選んでいた。

「少々お待ちください」

シヨラが注文を伝えに裏のキッチンへと消えるのを見送つてから、レスチアが水を飲み干す。ハンターの存在をラビ越しに発見すると、レスチアは口元をフツと緩めた。

「これはこれは裏切り者のハンターさん。『機嫌いががですか?』『なにを企んでいる?..』

「さあ、なんのことやら?..」

ギュッとコブシを握り、レスチアを睨みつけるハンター。だが、なにもやっていないレスチアを捕まえるなど、当然出来るはずがない。

結局だれ一人として、レスチアを追い出す子など出来なかつた。

事件を起こそうとして

いる証拠でもあればまだしも、いまはただの観光客に過ぎないのだ。

「お待たせしました。ランチです」

「いやいや、どうもありがとうござります」

食事と一緒にトレイに乗せられたフォークを掴み、レスチアは周りの注目を集めながら

悠然と食を進める。

「うーん、とっても美味しいですねえ。こんなに美味しい料理が出せる店なら、町が大き

くなればもっとお客様も来るでしょうに」

「わたし一人で作ってるんだ。これ以上お客様が増えても裁ききれ  
ないわよ」

一通り注文を終わらせた二オが、レスチアの前へと姿を見せた。

食べる工程を逐一観察

しながら、時折唇をかんでいる。

## その2・フューミニーの持参品

と、そこに轟がしく店内へと飛び込んできたのは、小さなフュアリーネの姿だった。

「こんなちはー！ 今日はこんなもの拾つてきたよー。」

大きな物体を手に持ち、店内を飛び回つてこるフューミニーの姿で、客の反応は素早いものだった。

「うわっ、フューミニーー。」

「なにが起こるかわからん、逃げるー。」

颯爽と逃げ出す客を見送りつつ、二オは大きくため息をついた。店内に残つたのはなに

が起こつたかわからないレスチアとリビ、事態になれているハンタートクネスだけだ。

「フューミニー……来るときは事前に連絡をしてつて言つてるでしょ？」

「あはは、そうだったね。まあいいじゃないの」

「ぜんつぜん、よくない……」

フューミニーは店内を飛び回るのを止め、二オのすぐ側まで降りてきた。手に持つていた

ものをカウンターにドンとおき、得意げに胸を張る。

「それよりもこれだよ。面白いものをみつけただけで、これなにかなあ？」

「ん？」

みんなが一斉にフューミニーの持つてきたものを覗き込む中、レスチアだけがビクッと体

を震わせ、座つていた席から立ち上がつた。

「どうかした？」

「こえいえ、なんでも『やこませんの』んですよ？」

フニミニーの持参品は赤いデジタル数字がカチカチと音を立てつつ、一つずつ数を減らしていた。中央からいろいろな色の配線が姿を見せては、いざこかへと繋がり姿を消している。

「口調がおかしくなつてゐるけど……本当になんでもないの？」

二オが目じりを吊り上げながら、レスチアに迫りつとする。その後、ハンターの絶叫が店内へと響き渡つていた。

「こりや、时限爆弾だぞ！」

「じ、时限爆弾！？」

ハンター以外の全員が一斉にカウンターから離れると同時に、レスチアがオートエーガンを飛び出そと床を蹴つた。だが。

「どこいくつもり？」

カウンターを飛び越えたシェラが、入り口近くまで進んだレスチアの襟首を掴んでいた。

じたばたと暴れるレスチアを軽々と持ち上げたため、レスチアの足は空回りしている。

「シェラ！ そのまま捕まえとい、絶対に逃がしちゃダメよ！」いつたんはカウンターから離れた二オが、时限爆弾を調査しているハンターの側へと恐る恐る近づいていった。

「ハンターさん。大丈夫？」

ハンターは手に握つていた时限爆弾をそとカウンターへと戻した。額に広がっていた

汗を拭い、ゆっくりと息を漏らす。

「どうやら四桁の数字がパスワードになつてゐるらしい。パスワードで解除するタイプの时限爆弾のようだな。爆発まではまだ時間がありそうだ」

ハンターは懐からパインソング四インチを引き抜き、銃口をレスチアへと向けた。

「パスワードを教えて」

「ひつ、な、なんのことやうせつぱりでいざれこますの」じょー。」

「三秒以内に教えない」と、弾丸がお前の脳漿をぶちまけるぞ!」

「ひつ、ひいいああ!」

先ほどよりも早く足を回転させるも、やはり前に進むことはなかつた。

「一!」

「し、知らない!」

「二!」

「や、やめへくれえ!」

「三!」

「わ、わかった! 言つー ○四七八です!」

ガウン!

半泣きで絶叫したレスチアの頬をかすめ、弾丸がオートエーガンの壁へと突き刺さった。

レスチアの全身から、力が一瞬にして抜け去る。

「〇四七八だな」

平然とした面持ちでハンターは銃を懐に戻すと、パスワードを打ち込んだ。

「〇、四、七、八つと……」

「ドカアアアアアン!」

爆音におののいた全員が、一斉に床へと伏せる。だが、時限爆弾はピーという音を最後

に、まったく動かなくなつてしまつていた。

「な、なんだつたの、今の音……」

ニオが恐る恐る、伏せていた顔を上げる。店内は平然としたまま、爆発したようすはまったくない。

「あ、あはは、『めんなさい』。『んなに驚くなんて思わなかつたから』

頭をかきつつ、フューミニーが頬を染めながら店内を飛び回る。どうやら先ほどの爆音は

フューミニーがみんなを驚かそつと叫んだだけらしい。

「あ、あんたねえ！」

「怒らない怒らない。無事だつたからできるこだすらだつて。あはは」

「オはフューミニーを捕まえると、頭を指の先でぐりぐりと押されつけた。

「やつて、いい冗談と、悪い冗談の、区別が付かないのは、この頭かあ！」

「『めん』めん、悪かつたつて

「ちつとも反省してない！」

「オとフューミニーのやりとりを、平和そつに見守る三人。クネスが違和感に気づいたのはそのときだつた。

「シーラ、レスチアは？」

「ん、えつ？ あ、ああ！」

「逃がしたのか！」

先ほどまでシーラの手に吊つ上げられていたレスチアの姿は、すでに店内から消えさせていた。

「だ、だつて、爆弾が爆発したと思つたから、自分の身を護るのが精一杯で……」

「くそつ……」

ハンターが急速でオートエーガンから飛び出す。

### その3・意外な人物と二つの……

だが、意外にもレスチアは店のすぐ前で、意外な人物に捕らえられていた。

「ハンター。あつさりと逃げられてんじゃないわよ」  
レスチアの腕をひねりつつ地面にねじ伏せていたのは、黒い上下にボニー・テールの赤い髪、以前ハンターとシェラと共に忘却の遺跡へ行つたレッショウだつた。

「くつ、離せ！」

「悔しかつたら自力で逃れてみたら？ もつとも……」

抵抗しようとレスチアにレッショウは、髪をかきあげつつふところからデザートイーグルを取り出した。

「死ぬ覚悟が出来てるならね」

「ひいいい！」

頭越しに感じる銃口の感触に、レスチアはあつさりと大人しくなつてしまつた。

「どうしてここに？」

「まつ、詳しい話は中で。ここつをふんじばつてからね。さつ、立つのよ」

無理やりレスチアを起こし、レッショウはオートエーガンへと入つてきた。店内から発掘したロープでレスチアをぐるぐる巻きにして、席の一つへと座らせる。

レッショウはカウンターへと座り、シェラの出してくれた水を一気に飲み干した。店内には先ほどのメンバーのほかに、銃声とフュミコーの偽爆音によつて裏から出てきたアルマ

が加わっている。

レッシュに事の成り行きを説明すると、今度はレッシュが自分の現状を説明した。

「ウォルガレンの滝をおびやかすこの男を監視しろっていうのが、今のわたしの任務だつたの。んで、ようすをうかがつていたら、突然飛び出してきたもんだから、チョチョッと

捕まえたわけよ」

「さすがは盗賊、身の軽さは……」

「盗賊つて呼ぶな」

カウンターに片肘をつき、口元を緩ませつつハンターの額に「デザートイーグルが突きつけられる。ハンターはひきつた笑いを放ちながら、両手をゆっくりと擎げていった。

「で、この爆弾はこいつが仕掛けたものなのかな？」

解除済みの時限爆弾を観察しながら、アルマ。すでに爆弾のカウンタは消えており、衝

撃などを与えない限りは爆発などしないだろ？

「間違いないんじやない？　こいつが解除パスワード知つてたんでしょう？」

レスチアを指差しながら出したレッシュの意見に、全員同時に頷く。

「んじや、フュミコ。」この爆弾はどうにあつたんだ？　聞くまでもないが

「んーとね。ウォルガレンの滝のそばだよ。他にもいくつかあつたけど、これが一番軽かつたから」

「やつぱりな……」

「滝を壊すのが目的つてわけですねえ……」

うーんと唸りつつ、クネスを除いた全員が考え込む。クネスは周

りをきょろきょろと見

回した後、恐る恐る右手を上げた。

「あの、ちょっといいですか？」

「なんだクネス」

「今的话……ちゃんと聞いてました？」

「なんのことですか？」

だれもわかつていらない現状に頭を抑えつつ、クネスはフューリーにもう一度尋ねる。

「この爆弾は滝の根元にあつたんだよね？」

「うん、他にもいくつかあつたけど、一番軽いからこれをもつてきただの」

「一番軽いからって、時限爆弾を持つてくるなんて……他にもあつた!?」

「オの絶叫で、ようやく全員が我に返つた。あたふたと慌てふためくさまを、フューリー

ーはケラケラと笑つて見下ろしてくる。

「バカバカ！ フューリー、どうしてそんな大事なことを今まで黙つてたのよ」

「だつて、聞かれなかつたし……」

頭をかきながらへへと笑うフューリーにげんこつを食らわして、二オは縛られている

レスチアへと詰め寄つた。

「フューリーの話、本当なのかー!?」

「さあ、なんのことやら……」

そっぽを向いたレスチアの、口めかみとあごへと銃が向けられる。ハンターとレッショ

が同時に突きつけたものだ。

「わ、わかった。言えばいいんだー！」

「手間を取らせるな。話は滝に向かいながら聞くぞー。フューリーはもしものために自警

団に連絡してくれ！

「了解だよ！」

フューミリーが窓から飛び去ったのを見送った後、ふんじばつたままのレスチアをハンターが引きずりつつ、レッショウが尋問を行う。その背後にニオ、クネス、ショラ、アルマ、ラビが続いた。

「レッショウ、尋問うまいの？」

ニオが尋ねると、ハンターはにやけながら答えた。

「職業柄な。なんせ……」

「盗賊って呼ぶなよ」

尋問を中断したレッショウが、振り返らずに冷たい口調で呟く。

ハンターは反射的に両

手を挙げ終えていた。

「それより、爆弾について分かったわよ。残りの爆弾は三つで、それぞれ解除方法が異なるらしい」

「んじや、解除方法を全部聞けばいいだろ？」

「それが……ね？ とにかく全ての爆弾を発見しましょう。全てはそれからね」

滝のふもとについた二オたちの前に、自警団のハリアーが立ちふさがつた。

「ちょっと待て、ここは立ち入り禁止だ。二オたちなら知ってるだろ?」

進行方向をさえぎられたレッシュは、いやいやながら服の右袖をめくつた。緑色に輝く

腕輪が、敢然と姿を現す。それをハリアーの目の前へとかかげてみせた。

「王都第四特殊部隊所属、レッシュ・セルフィッシュだ。爆弾が仕掛けられたという疑惑があるので、通らせてもららう

「は、はい！」

初めて見た王都直属を証明する腕輪に、ハリアーは勢いよく敬礼をした。

「あなたはここに残つて、滝にだれも近づかないように誘導してくれる？　もうすぐ他の自警団のメンバーも来るはずだから」

ハリアーは頷き、すぐさま行動に移つた。それを背に、二オたちは滝のふもとへと近づいていく。

レスチアの見張りに残つたアルマを残して、残りのメンバーで手分けして爆弾を探す。

なにもしらないウォルガレンの滝は、いまもなお豪快に流れ続けていた。

元々人が入れないのを把握していたのか、隠し場所にはあまり気を使つていなかつた。

発見はそうむずかしいものではなく、数分後には三つの機械が二オ

たちの目の前に並んでいた。

デジタル数字が減り続けているのは最初の爆弾と同じではあるが、他の部分はまったく

といつていいほど異なる形式になつていて。

「さあ、説明しなさい」

レッシュの銃口を恐る恐る見やりながら、レスチアが爆弾について説明を始めた。辺りを得もいえぬ緊張感が包んでいく。

「ひ、一つは鍵を使って解除するタイプです……」

「で、鍵はどこだ？」

「そ、それが、どこかで落としてしまったよつで……」

アハハハと乾いた笑いを放つレスチア。その笑いを止めたのは、口の中に突っ込まれた

ハンターのパイソン4インチの銃口だった。

「本当だらうな？」

「ほ、ほんとう、へす……」

銃を口から引き抜き、ハンカチで拭いてからホルダーへと戻す。

ハンターはレッシュの

方を向くと、ポンと肩を叩いた。

「解除は頼んだぞ？」

「わたしがか？」

「この中で鍵開けについて一番詳しいのは、盗賊であるレッシュだろ？」

「盗賊って呼ぶな」

言いつつもレッシュはハンターの申し出に納得していたのか、すぐさま使い慣れたキー

ピックを腰に着けられた皮製のバッグから取り出す。それから少し離れた場所に鍵で解除する爆弾と共に移動し、解除を始めた。

## その5・五つのクイズ

「一つ目はクイズで解除するタイプです……」

「クイズですって？」

二オが聞き返すと、レスチアは口の先を使って機械の一部を指した。

「そ、その赤いスイッチを押すとクイズが始まります。五問正解で解除になります」

「なんなのよ、それ……」

あきれながらも、言われたとおり赤いスイッチを押す。すると備え付けのスピーカーから

音楽が流れ始めた。

『バクダンカイジョクイズニヨウコソ！ サンタククイズガゼンブデゴモン！ イチモン

デモマチガエルト シラナイヨオ』

小さめのディスプレイに、カタカナで読みにくい文章が現れた。

その場にいる誰かの喉

が、ゴクリと音をたてる。

『ダイイチモン！ ハンドガンノゲンカイヨコエタ、ライフルノタマヲウツコトガデキル

ケンジユウハ？ イチバン＝三五七マグナム ニバン＝四五四カス

ール サンバン＝十三

リオート』

「で、答えは？」

二オがレスチアに聞くと、またもレスチアの口から乾いた笑いが漏れ出していた。

「か、解除するときのことなんて考えてなかつたもんで、適当に問題選んだんですよね。」

アハハハハ……

直後、二オのげんこつがレスチアの頭部を襲つ。つめき声を上げるレスチアを無視し、

二オはため息交じりで問題を見直した。

「どうやら拳銃の問題らしいが、二オにはまったく見当が付かなかつた。どれも聞いたことのない名前ばかりで、どんなもののかすら想像もつかない。

「ハンターさんなら、わかる?」

「ん、どれどれ?」

ハンターは問題を黙読で読むと、得意げに軽く鼻をこすつてみせた。

「簡単だなこりや。 答えは……」

「答えは一番よ」

ハンターが答える前に、後ろから現れたレッショウが二オに伝える。二オはディスプレイ

の下に配置された三つの数字の一つ、一番のボタンを押した。

ピンポーンという音に続いて、スピーカーから歓声が聞こえてくる。

「解除する気がなかつた割には、こつてますねえ……」

何気につぶやいたラビは、物珍しそうに爆弾をツンツンと突つづいていた。

「ありがとうレッショウ、爆弾のほうは解除できたの?」

「当たり前でしょ? 敏腕冒険者! をあなどるながれつてね」冒険者を強調しながら手に持つていた解除済みの爆弾を、二オの前にぶら下げる。先ほ

どまで動いていたデジタル数字は消え、ウンともスンとも言わなくなつていた。

「それじゃあこの調子で、このクイズ爆弾も解除しちゃいましょー!」

「みんなで力をあわせれば、きっと解除できるはずですよー! ラビが腕を振り上げ、ピョンピョンと飛び跳ねる。二オは黙つて頷くと、今度はみんな

に聞こえるように問題を読み上げた。

「えつと、第一問。エルフの平均寿命は？ 一番=十歳、二番=百

歳、三番=五百歳」

「これはわたしがわかりますよー。」

素早く手を上げたのは、エルフであるラビだつた。

「まあ、ラビが分からなかつたらまずいよね」

「答えは三番ですか！ 一番とか二番つてことはないですかー。」

「消去法つてやつね……」

二オが三番のボタンを押すと、ピンポーンとつ音と、今度はどよめきがスピーカーから聞こえてきた。

「さて、第三問ね。リュウゼツランから造られたお酒は？ 一番=

テキーラ、二番=ウオ

ツカ、三番=ビール……だつて。いつや、いつののんべえが役に立つわね！」

後ろを振り向くと、レスチアの見張りをしていたアルマが、自分を指差していた。

「ほら、答えて、どれ？」

「自分の親を捕まえてのんべえとは、どつこつと見だ。まったく…

アルマは問題を聞いてなかつたのか、もつて一度ティスプレイの問題を読んでから答えた。

「これは一番だな。テキーラだよ」

一番のボタンを押す。ピンポンとこつ音とはやし太鼓の音が、スピーカーから聞こえてくる。

「この調子だな……」

「うん、さあ次の問題は……つて、え？」

「どうかしたの？」

後ろにいたシオラが、二オの後ろから問題を覗きこむ。次の瞬間、

シヨラの絶叫が近辺にこだましていた。

「な、なによこれ！ どうこうつもつよ！」

レスチアの首を絞め、ブンブンと前後左右に振るシヨラ。その横で二オが忍び笑いを放

ちつつ問題を読み上げた。

「シヨラフィール＝ファインディットの好きな男性は？ 一番＝マックス、二番＝ハンタ

一、三番＝クネス」

「ちょ、ちょつと二オ！ その問題はわたしが答える！」

二オを押しのけて、シヨラが爆弾の前で陣取る。荒くなつた息を整えようと深呼吸をし

ていると、後ろのほうから二オとクネスの会話が聞こえてきた。

「隠さなくたつて、みんな知ってるわよね？」

「そうだね。たぶんみんな知ってるんじゃないかな？」

「ええええ！ そんなの嘘よ！ でたらめよお…」

涙をまじえた懇願の目で、シヨラが振り返る。二オとクネスはお互いの顔を見合わせながら含み笑いを漏らしていた。

「じゃあ、みんなで一斉に答えを言つてみよつか？」

「あ、それいいね！」

「よくなあーい！」

絶叫するシヨラはみんなの口を塞ぐとしたが、一いつしかない手では限界がある。

「せえーのおー！」

二オの合図と共に、一斉に口が開かれる。

「いちばんー！」

「いちばんですかー！」

「いちばんだろー？」

「こねばんですよね？」

「ニイ いちばーん！」

「ちょっと！ いま一一番つて言おうとして言い直した奴がいたじゃない！ だれなの！？」

やつぱり知らない人がいたんじゃないの！」

だが、だれもショラの申し出に反応するものはいなかつた。犯人が分からずに涙ぐむシ

エラの肩へ、慰めようと手を回す人影があつた。レッショである。

「わたしはまったく知らなかつたが……まあ応援してるよ」

「そういえばレッショはマスカーレイドに住んでるわけじゃないから、知つてるわけないよね」

ケラケラと笑い出す二オに合わせて、ショラ以外の全員が声を上げた笑い出した。

「あんたたちい……」

ショラは反論しようとしたが、あまりのショックからかそのままぐつたりとうなだれてしまつた。少し離れた場所へと移動し、うずくまつてなにやらじりをしている。

「さてと、のんきに団欒をしてる場合じゃないぞ。早く答えを押せ」

「つとと、そうだつた。じゃあ答えは一番つとー！」

二オが一番のボタンを押すと、いつもの音に、今度は高低さざわまな口笛の音が聞こえてきた。

「さつ、次が最後の問題よ！ なになに……」

二オは問題を読みながら、目が点になつていた。横からクネスが顔を割り込ませ、代わりに問題を読み上げる。

「えつと、納豆バナナミックスカレーはまずいか？ 一番=うまい、二番=まずい

だつて……最後だけ一択みたい」

「なんなのよ、その問題は……」

レッシュが二オの顔をチラリと見る。二オは慌てて両手を振った。

「いや、うちのメニューといえど、さすがにこんなゲテモノは……「想像の域ではす」といってほいけど、あんがい美味しいかもしけないなあ……」

なかなか結論の出ない討論が続く中、一刻一刻と爆弾のカウントは進んでいく。

そこでふと、二オが思いついたように手を打った。

「わたし、今から作つてこようか?」

「いや、そんな時間はないだろ……」

「でも、そうなるとこんな問題、ビバやつて答えを出せばいいが分からなによ!」

うんうんと、唸るだけになつた二オたち。そんな中、ラビだけはなぜか頭に指をあてながら、首を左右に振つていた。

「どうかしたの、ラビ?」

「疑問なんですかじょ、これつてレスチアさんが作った問題ですよねえ?」

「そりや そりでしょ」

「だつたら、レスチアさんに聞けばいいんじやないんですかあ? クイズの答えは忘れて

てもお、美味しい、まことになんていう主観的な内容まで忘れるとは思えませんじい、

わたしたちとレスチアさんでは味覚も違いますからあ

全員が一斉に、レスチアの方を振り返つた。腰に手を当てて見張っているアルマの横で、

キヨロキヨロと辺りを見回している。

ハンターとレッシュが、おもむろに立ち上がる。次の瞬間、ビビいう状況が自分の身に

襲い掛かるかを理解しているレスチアは、吐き出すよつにボソリと

告げた。

「まことに……」

「よおし、でかしたラビー！」

「オガラビの頭を撫でると、満面の笑顔と共ににゃはーんといった  
笑い声がラビの口から漏れる。

まことにボタンである一番を押すと、吹奏楽器によるファンファーレが流れてきた。

「オメデトウゴザイマス！ コレニテカイジョカンリョウデス！」

その言葉がディスプレイに表示され、共にカウンタの数字が消えた。

「よし！ あとは最後の一つね！ 矢でも鉄砲でも持つてこいつてのよ！」

「「」の場合、持つてこられるのは爆弾以外にないと思しますが：」

…

ラビのツッコミを無視して二オガ振り返ると、レスチアは聞かれる前に答えました。

「最後の一つは大丈夫です。わたしの言つとおり順番に配線を切つていけば解除できるはずです」

「よし、レッシュ頼んだ……」

ハンターの口が止まる前に、背後から罠の解除にでも使われるであろう二ツパーがレッシュから手渡される。

「おれ？」

「わたしも一度危険な目にあつてゐるんだから、今度はハンターの番よ」

「まじですか？」

「まじです」

その場にいるメンバーの全員が、ハンターへと視線を集中させる。

ハンターはうつむき

加減で苦笑を漏らしつつ、レッシュからハサミを受け取つた。

「わかった。やってみるさ」

「では最初に、緑色の五本の線を全部……」

レスチアの指示通り、ハンターは的確に配線を切断していく。最後に残つた赤と青の太

い配線を残したところで、ハンターは額の汗を握つた。

「さあ、これで最後だ。どっちの線を切ればいいんだ？」

「……赤だ」

レスチアに言われたとおり、ハンターは赤の配線を切る。だが、カウントは消えなかつた。それどころか誤作動を察知したのか、残り五秒となり〇へと近づいていった。

「おいつ！ どうじい！」とだ！」

「さ、さあ、なんのことやら？」

「くそつ、みんな逃げる、爆発するぞ！」

ハンターの合図と共に、一斉に爆弾から離れていく。レスチアは一人残り、五、四と秒

数の減つていく爆弾を黙つて見つめていた。

「なにやつてんだ、死にたいのか！」

「死にたい？ フフ、なんのことでしょうか？」

今まで従順だつたレスチアが、嫌らしげな笑いを放つ。みんなが地面へと飛び、顔を伏せて爆発に備えたところで、ちょうどビカウンタが〇を表示した。だが……。

「パパパパパパパパ、パパパパパーン。おはよう、ぼくレスチア。起きる時間だよ？」

起きるおお！ パパパパ……」

辺りに執拗に鳴り響く、わけの分からぬ音と声。続いてレスチアの、狂つたように響

き渡る哄笑。うるさくわめく機械が爆弾とはかけ離れた、単なる目覚まし時計だと気がつ

くまで 二オたちはまったく動けなかつた。

「くつ、あわま！ どうじうことだ！」

ハンターがバイソンをレスチアのこめかみへとあてる。だが、いまでのようになづえた

表情はしていない。

「どうもこうも、これはわたしが失くしてしまつたただの目覚まし

時計ですよ

「ふざけるなー！」

「ふざけてなじこませんよ。わたしが一言でもこれを爆弾だと言いましたか？」勝手に勘

違いましたのは貴方たちでしょ。まあどうしてくれるんです？田  
覚まし時計で拘束など

前代未聞なのですか？」

鼻で笑つたレスチアの襟首を、今度はレッシュが掴みあげる。

「いい覚悟だな。他の爆弾もきちんと調べて、引導を渡してやるー」

「フフ、楽しみにしますよ」

その頃ようやく現れたフューリーと自警団のメンバーが、レッシュと一緒にレスチアと

解除済みの爆弾もどきを持って事務所へと帰つていった。、

「遅かつたな、フューリー」

息を切らしているフューリーに、ハンターが尋ねる。フューリーはハンターの頭の上に止まりながら、

「だつていいくら説得しても、信用してくれなかつたんだもん！」

腕を組んでプクーッと頬を膨らませる姿に、全員の口からふうーつとため息が漏れた。

「人選ミスだつたわね……」

ハンターの肩を叩きながら、二オ。ハンターは無言で頷くと、自警団の後に続いて滝を

後にしていく。

「ショラ。いつまでへそまげてんの！」

「だつてだつて……このままじゃマスカーレイド中に……」

「大丈夫だつて、みんな口堅いんだから。ほら、もう帰るよ

ショラを二オとクネスで支え、残りのメンバーも滝のふもとから立ち去つていく。

一日間の調査の結果、レスチアが持ってきた爆弾もどきを囲つ  
は、全て田覚まし時計で  
あることが判明していた  
。

爆弾騒ぎから一回田の夜、星空のよしあわせめくウォルガレンの滝の前にかかった橋の

上で、レッシュはボーッと滝を眺めていた。

延々と流れ落ちてくる水流が地面にぶつかり、はじけてはレッシュの下を通り下流へと

流れしていく そんな流れを何度も見やり、時折口から漏れるため息に、我ながら嫌気が差す。

「なんだ、ここにいたのか」

背後から現れたハンターが、レッシュに声をかける。レッシュは振り向きもせず、不機嫌そうに返答した。

「ここ以外に、心を癒せそうな場所があるのかしら?」

「いや、ないな。間違いなくここが最高の場所だ」

レッシュの隣に陣取ったハンターが、顎に手をやりつづむく。しばらく無言のまま時が

過ぎ、先に口を開いたのはハンターだった。

「今考えれば、最初から不自然なことばかりだった。本当に爆弾を仕掛けたのならレスチ

アがオートエーガンに姿を現す必要などない。解除も難しいものはほとんどなく、クイズ

もおれたちの得意分野が多かつたしな。レスチアは爆弾もどきを発見して欲しかった。そ

して最後には失敗して爆弾でないことを知つて欲しかった

「全では王都の命令で動いている、わたしの監視をなくすため……」

ハンターは黙つて頷いた。レッシュは両手で頭を抱え、小声でうめくようにぼやいた。

「自警団にみつちりと説教されたよ。人騒がせにもほどがあるってね。この分だと王都にも連絡が行くだろ?」

「だれしも失敗はあるさ」

「失敗程度ならね。でも完敗ってのは初めてなんだ」

橋の欄干に頭からもたれかかり、レッシュは大きく息を吐いた。横から見える顔色は、

少し青ざめているようだ。

「まったく、敏腕盜賊のレッシュともあううものが、尾行を見抜かれるなんて情けない」

「ああ、まったくだ……泣けてくるよ」

いつものセリフが聞こえてこなかつたことで、ハンターは想像以上にレッシュが落ち込んでいることによつやく気がついていた。

レッシュはハンターと目を合わせないまま、欄干に顎を乗せて呆然と滝を見つめるだけだ。心なしか潤んだ瞳で、かすかに体を震わせている。

「まあ、そのなんだ……」

ハンターは頭をかきながら、独り言のように淡々とつぶやいた。

「今回の事件で良かつた点もある。これから先、滝の警備はさらに厳重になつていくだろ?」

うし、レスチアだつてマスカーレイドに来るだけで、尾行とまでは行かなくともチェックされるだろう。なにより、本当の爆弾だつたら今頃ウォルガレンの滝はなくなつてたかも

しれないんだ。そう考えれば……

「氣休めだな……」

「氣休めでも、いま一番レッシュが欲しているものだ? 行動を非難せずに肯定していく人は」

フツといふ短い笑いと共に、レッショウが顔を起こしてハンターを見た。先ほどまで真っ青だつた表情に、わずかだが赤みが差してきている。

「さすがはハンターだ。よく分かつてゐる」

フーッと細長い息を吐き、レッショウは大きく背伸びをした。

「くよくよしてもしかたがないか……」

「そういうことだ。大事なのはウォルガレンの滝を護りきること。その点に関して言えば、

今回は成功つてことになる」

「物は言ひようだな」

「なに言つてんだ。言ひくるめは盗賊の得意分野だろ?」

「盗賊つて呼ぶな」

レッショウの言葉で、二人に笑みが戻つてくる。ハンターはレッショウの頭に手をのせ、髪の毛をぐしゃぐしゃにかき混ぜた。

「な、なにすんだ!」

あたふたと髪を元に戻そうとするレッショウを笑い飛ばしながら、ハンターはくるりと向

きを変えた。

「さつ、行くぞ。オートエーガンで二オがお待ちかねだ」

「二オが?」

「いいから来い」

すんすんと進んでいくハンターの後を、レッショウは慌てて追いかけていった。

オートエーガンの中は閉店間際のせいか、閑散としていた。いつも  
の席で小説を書いて

いるクネスすら、もう姿を消してしまっている。

「二オ！ レッショをつれてきたぞ」

「あ、いらっしゃい。待つてましたよ！」

後片付けを一時中断して、二オは一人の下へと軽やかな駆け足で  
近づいてきた。ポケ

ツトから折りたたまれた紙を取り出し、レッショへと渡す。

「はい、これ請求書」

「請求書？」

「ハンターさんに聞いたたら、レッショに請求してくれって  
レッショは折りたたまれた紙を広げた。そこにはこう書いてあつ  
た。

『請求書 レッショ＝セルフィッシュショ様

十万バツツ

但し壁にできた弾痕の修理代として  
上記請求いたします。

オートエーガン 二オ＝グ

ロス』

「な、なんだこれは！」

レッショがハンターにすごい見幕で尋ねると、ハンターは半笑いで  
答えた。

「いやあ、レスチアを齧るために撃つた銃弾が、オートエーガンの  
壁に弾痕を作っちゃつ  
てな。その修理代だ」

「それをなんでわたしが払わないといけないわけ！？」

荒れるレッショとは正反対に、ハンターは落ち着いたようすでレ

ツシユの肩を叩いた。

「ルームクリーニング代、九十五万バツツ……」

「ぐつ！」

「忘れたとは言わせないぞ？」

ニツコリと微笑むハンターに、目を輝かせて現金を待つニオ。レツシユは觀念したのか、

財布から十万バツツを取り出しニオへと渡した。

「どうもお、はい、これ領収書！」

嬉しそうに領収書を渡すと、ニオは足はやに店内の片づけへと戻つていった。

「九十五万バツツ請求してゐわけじゃないんだから、かわいいもん

だろ？」

「ええ、嬉しくつて涙が出てくるわ……」

再び潤み始めたレツシユの瞳がなにを意味していたのか それ

はだれにもわからなか

つた。ただ、ウォルガレンの滝を護つとするマスカーレイドの住民と、レスチアとの抗

争は続いていく それだけはだれもが感じ取つていた。

## その8・請求書（後書き）

マスカーレイドに異常なし！？第五話 レスチア再び いかがだったでしょうか？

今回は滝の崩壊を諦めないレスチアと、マスカーレイドの人々の第一ラウンドを書いてみました。

といつても、レスチアの今回の目的は滝ではなかつたわけですが。これで一勝一敗になつたわけです。レスチアもまだまだ何かをたくさんでいるでしょう。また、マスカーレイドの人々も、滝を破壊されないために創意工夫をこなしていくと思われます。

マスカーレイドに異常なし！？シリーズはまだ続きますので、今後ともよろしくお願ひします。時間のある方は感想をお聞かせくださいと幸いです。

ではでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7702a/>

マスカーレイドに異常なし！？ 第5話 レスチア再び

2010年10月21日13時54分発行